2023 年度　人類文化研究コース　学生派遣事業　研究成果レポート

山本 恭正

１．事業実施の目的

日本文化人類学会第 57 回研究大会に個人発表の発表者として参加すること

2.　実施場所

広島県立広島大学広島キャパス

3.　実施期日

2023 年　6 月　2 日（ 金 ）～　2023 年　6 月　4 日（ 日 ）

４．成果報告

●事業の概要

日本文化人類学会は、人類の文化を研究する文化人類学、社会人類学、民族学などの発展と普及を図ることを目的とする学会で、研究大会は年に一度、会場持ち回りで開催されている。今年は第 57 回研究大会が広島県立大学において開催され、私は発表者として持ち時間 20 分（プレゼンテーション 15 分、質疑応答 5 分）の研究発表を実施した。前年度の大会は「ハイフレックス型」と呼ばれる、オンラインと現地のどちらでも参加することができる開催方式で開催されたが、今年度からは対面参加型のみの形式に戻された。

研究大会は個人発表（映像作品含む）と分科会、開催校企画「人類学教育ワークショップ」、研究倫理委員会特別シンポジウム「『アイヌ民族に関する研究倫理指針（案）』から考える、文化人類学の過去と未来にむけての展望中間報告」男女共同参画・ダイバーシティ推進委員会特別シンポジウム、学会賞・奨励賞・受賞講演などが行われた。

特に印象に残ったのは、特別シンポジウムの伊藤敦規（国立民族学博物館　准教授）の発表「日本におけるアイヌ民族研究への文化人類学的アプローチ」における「当事者の継承、非当事者の非継承」というフレーズ、飯嶋秀治（九州大学　教授）の発表「文化人類学（者）の引き受ける責任とは／変化の可能性」におけるテッサ・モーリス＝スズキを引用した「連累（責任は私たちがつくった。連累は私たちをつくった。）」という言葉、石原真衣（北海道大学　准教授）の民族概念の研究対象化を求めるコメント「総務省は民族に関する正式な定義はないと述べている」という指摘である。その後の会員総会では、日本文化人類学会として、アイヌ民族や先住琉球民族に対して謝罪をするかという点において議論が行われた。

7 つに分かれて行われた分科会では「人類学史の新たな視点―フィールド経験とアーカイブ調査の結合」を聴講し、中生勝美(桜美林大学　教授)の発表「戦前の内蒙古におけるドイツと日本の特務機関―モンゴル学者ハイシッヒと岡正雄」において、白黒の画像データを中心にナチス関係者と岡正雄との知られざる関係の報告がなぜアーカイブ調査が重要かを理解するうえで示唆的であった。また、飯田卓(国立民族学博物館　教授)の発表「両大戦間期の日仏交流―アンドレ・ルロワ=グーランと日仏会館、国際文化振興会」においては、ジュネーブの国際連盟に渡欧した

柳田国男やオーストリア・ウィーンに留学中の岡正雄と同時期に、フランスに留学していた松本信廣の足跡を追い、日仏交流が深まる過程やルロワ=グーランとの共通点なども日本人とフランス人の研究者の活動を通してみえてくるさまざまな真実が、フィールド経験とアーカイブ調査の二つを同時に進めていくことの意義や重要性を端的に物語っていた。

個人発表では、古川不可知（九州大学）の発表「戸外にあることの想像力―日本における登山とキャンプ、および人類学」が特に印象に残った。今西錦司や梅棹忠夫らは探検・登山を重視した活動を展開してきたが、今西が日本の野外科学において探検と登山および学問が不可分であることを繰り返し指摘し、日本登山史のキーパーソンとも呼べるような人物でもあったことには驚きとともに自分の調査研究のなかで参考になる知見を得ることができた。

私は 2021 年度に、今西らと活動をともにした時期があり、最終的に世界遺産に登録される大峯奥駈道を復興させた和歌山県新宮市の登山団体・新宮山彦ぐるーぷに参与観察型のフィールド調査を実施してきた。彼らの語りには随所に今西と一緒に山の中でキャンプや宴会をした思い出や当時の登山が近年のアウトドア観光とは異なる尺度から盛り上がりを見せていた時代的な背景などが登場する。

古川がいうように、登山、キャンプ、人類学がいずれも探検の落とし子であり、新宮山彦ぐるーぷが戸外という空間で共同性や自然との関係性を育みながら文化的・歴史的な実践をおこなってきたと仮定すると、当該団体の活動は今西や他のさまざまな出会い、出来事などを通して一般的な大衆登山から「パイオニアワーク」としての探検を志向する側面があったのではないかという感想を持った。

●学会発表について

発表タイトルは「新しい道の創出と地域社会――世界遺産・熊野古道おけるトレイルランニングイベントの開催をめぐって」で、主に文化遺産とトレイルランニングをテーマとして発表した。まず、本発表における新しい道とは熊野古道ではない山道あるいは生活道のことで、熊野地方において文化遺産の道とそうでない道が創出されている状況を説明した。その後、発表の目的がなぜ世界遺産の道でトレイルランニングイベントを開催したり、走ったりすることができないかを明らかにすることだと述べた。先行研究では、大きく分けて三つ、文化財活用の機運、地域性、トレイルランニングに関することを紹介した。

結論は、世界遺産の道でのトレイルランニングイベントは、物質的な意味での現状変更、棄損をもたらす恐れがあること、騒々しさやスポーツのイメージに結びついて祈りの道の文化的景観が損なわれる可能性があること、三県教育委員会が策定した紀伊山地の参詣道ルールの存在、指定管理団体である市町村教育委員会と事前打ち合わせが不十分であることなどが理由でイベントを開催したり、走ったりすることができないことを説明した。また、その結果、日本人は古くから山を走ってきたが、身近な山道が世界遺産になることによって、自分たちの身体や記憶といった環境との関係性から切り離され、国家的・国際的な道の価値と物的環境のみが継承される傾向がある点を指摘した。

質問では、トレイルランニングイベント開催のきっかけとなった新しい道である尾鷲トレイルがどのような経緯を辿って地域社会から見出されてきたか。トレイルランニングの開催をめぐって、信仰的な理由から問題視されなかったかという二つがあがった。前者は、尾鷲ツーデイウォークというウォーキングイベントが 2013 年から毎年 11 月に開催されるようになり、社会的行為である歩くことを通じて街の周辺環境が遺産として見直されてきたことだと回答した。後者については、本発表の調査地である三重県東紀州エリアにおいて、私が調査したり、見聞きしたりした範囲では信仰上の理由が原因でイベントの開催を推進する団体と衝突したりトラブルになったりしたという事実はなかったと回答した。

●本事業の実施によって得られた成果

・道の文化遺産化を研究している研究者と宗教社会学の分野から熊野の地域研究を行っている研究者から上述した二つの質問をしていただき、発表後に意見交換・情報交換などを行い、名刺交換を伴う交流を通して、同じテーマを扱う研究者と親睦を深めることができた。

・上述したような自分の興味関心に近い研究者の発表を聞くことによって、今後の博士研究の方向性にヒントを得たり、確信を持ったりすることができた。

●本事業について

文化人類学を専攻する大学院生にとって現地における調査研究や国内外の学会発表などの研究活動は非常に重要であり、報告者は初めて博士課程において学外における研究発表を実施することができた。この事業は非常に有益な事業であり、今後も継続して欲しい。